E19

防災研究のアウトリーチと正統的周辺参加理論
Outreach of Disaster Research and Legitimate Peripheral Participation Theory

矢守 克也
Katsuya YAMORI

Legitimate peripheral participation theory proposed by Lave and Wenger (1991) is a theory about learning. In this view, learning should not be considered as a transfer of knowledge and/or skill from those who know to those who do not, but as participation in actual activity in a legitimate community of practice, even though the participation is limited just in a peripheral form. In the context of outreach of disaster researches, it is important to involve the general public into actual disaster researches, even if the involvement is not in a full scale, but in a peripheral or limited manner, especially during an initial stage of the outreach. A new disaster education program in cooperation with “Manten” research program (Next-generation dense seismic observation) is one of the challenges towards this goal.

１．正統的周辺参加理論

レイヴとウェンガー（Lave & Wenger, 1991）が提唱した正統的周辺参加理論は、学習に関する理論である。ただし、ここで言う学習は、学校や子どもだけを念頭に置いているのではない。そうではなく、学習は、広く何ごとか学ぶこと一般を指す。よって、子どもが九九をできるようになるのも学習だが、高齢者が不得手だった携帯電話を使いこなせるようになることも学習である。あるいは、料亭で下働きをしていた弟子が一人前の板前になっていくのも学習であるし、だれかマグニチュードという言葉の意味を知るのも学習である。

正統的周辺参加理論とは、学習を、何かを知っている／できる人から知らない／できない人への移転だと考える常識的思考からの決別を意図した理論である。そうではなく、レイヴらは、学習とは、本物の［＝「正統な」］（防災）研究や実践の活動をしている人たち［＝実践共同体］に、初歩的かつ部分的な形［＝「周辺的」］でもいいから学習者が加わる［＝「参加」］ことだととらえる。別の角度からとらえれば、レイヴらによれば、教育とは、「正統的周辺参加」を持続的に可能とするための意図的な働きかけ、と定義されうる。

これは別段むずかしいことを主張しているわけではない。たとえば、先に触れた板前を考えてみればよい。板前の卵たちは、最初は厨房の掃除しかさせてもらえないかもしれない。しばらく経っても皿洗い止まりかもしれない。しかし、それらの活動は、料亭という本物の実践の場の、周辺部ではあるが、必要不可欠な一部をなしている。この周辺的ではあるが正統な活動への参加の程度と規模が高度化することそのものが、「学習」（一人前の板前になること）に他ならない。

２．防災研究のアウトリーチ

アウトリーチとは、「研究者や研究機関が研究成果を国民に周知する活動」のことだから、むろん学習と深い関わりを有する。上記を踏まえれば、たとえば、一見、高度な研究成果を非常にわかりやすく再現したプロダクツをアウトリーチの特効薬として開発したとしても、それを一度きり見せるだけ、少し触ってもらうだけといった形のアウトリーチでは、真の学習を促しているとは言えないであろう。同じことは、消火訓練における水消火器や、およそ本物の状況とはかけ離れている設定で行われる避難訓練などにも該当する。

要するに、防災研究の真のアウトリーチとは、災害や防災の専門家の本格的な活動の一部に、―その後、より高度な参加へと移行させていくための見通しを伴うという条件のもと、最初は非常に周辺的な形でよいから ― 一般の人びとの参加を促す活動でなければならない。本物の防災研究、正統な防災活動に、一般の人びとにも「一役買ってもらう」、「一枚噛んでもらう」、「一角を担ってもらう」ことが重要である。

地震予知研究センターと巨大災害研究センターが開始した「満点計画」（次世代型稠密地震観測）と防災学習との連動プロジェクトは、このような試みの一つとして位置づけることができる。